

＜今日の説教のポイント IIコリント 2章 12～17 節＞

1 (12-13) パウロの不安の内容とは？ — テトス、戻って来ず。

パウロの不安は、コリントの教会に遣わしたテトスがなかなかトロアスに戻って来ず、その報告が聞けなかったことにあります。コリントの教会で起こった問題に対してパウロは厳しい叱責の手紙を送ったので、それがどうなったかを知りたかったからです。

2 (7:5 以下) テトスとマケドニア州で再会。嬉しい報告を聞く。

その答えは次の 14 節ではなく、7 章 5 節以下に記されています。「マケドニア州に着いたとき、恐れがあったのです。しかし、気落ちした者をカブけて下さる神様は、テトスの到着によって私たちに慰めて下さいました」(7:5 以下)。テトスはコリントの教会の信徒はパウロを慕い、彼の伝道に仕えようとしていると伝え、パウロはそれを聞いて慰められたのでした。

3 (14-17) 不安の中にあるパウロを支えたものは何か？

ですから、今日の箇所 14 節以下で「神に感謝します」と言ってパウロが話し出したことは、不安の中にある時にも彼を伝道者として前に進ませたものが何かを示していると言えるでしょう。それは、神様がキリストにおいてなして下さったことを知り（「キリストを知るとい知識」14）、それを宣べ伝える務めへの使命感と言っていいでしょう（「わたしたちはキリストの神へのアロマです」15 直訳）。

過ぎ越しの祭りの食事の時、ユダヤ人は一つ空席を用意します。それはメシアの先触れであるエリヤが到来した時のための席です。「メシア（救い主）の前触れが食事の終わりまでやって来ないことはよく分かっている。～しかし重要なのは、彼が必ずいつか来る、そしてどの日に来てもおかしくない、という前提でことが進められていることである」（ロベール・アロン）。ホロコーストを生き残ったユダヤ人も、そのメシアをイエス・キリストに見たキリスト者も、どんな不安や絶望状況の中にあっても、ここにいない、しかし、必ず到来される約束のメシアを思いながら生きられる希望を持っているのです。時間の将来に神様の約束の成就を覚えながら生きられること。キリスト者の大きな慰めです。